博士学位請求論文審査報告

２０１１年3月９日

申請者　宋恵媛
論文題目　在日朝鮮人文学の歴史−１９４５年−１９７０年
審査委員　鵜飼哲　イ・ヨンスク　松永正義

１　本論文の構成

本論文は、朝鮮解放の年１９４５年から在日朝鮮人作家が日本の文壇に本格的に登場した１９７０年までの、日本語および朝鮮語の在日朝鮮人作家の文学作品を網羅的に検討することで、日本語作品のみを対象としてきた従来の通説の批判的書き換えを目指す文学史的研究である。

本論文は次の各章から構成される。

序章　在日朝鮮人文学史の「書き換え」のために

第１節　はじめに
第２節　先行研究
第３節　先行研究の問題点と新たな方法論の検討
第４節　本稿における呼称、定義、ジャンル、構成

第１章　在日朝鮮人「女性文学」

第１節　可視化のための方法論
第２節　朝鮮人女性と識字
第３節　書き始めた女性たち（1）―一世女性の場合―
第４節　書き始めた女性たち（2）―二世世代の場合―
第５節　在日朝鮮人女性が書くということ

第２章　朝連―民戦―総連系団体の文学運動の展開

第１節　脱植民地化の模索と蹉跌（一九四五年―一九四九年）
第２節　朝鮮戦争期の文学（一九五〇年ー一九五五年）
第３節　総連結成と在日朝鮮人文学の変容（一九五五年ー一九五九年）
第４節　文芸同結成と朝鮮語による創作活動の開花（一九五九年ー一九六七年）..
第５節　唯一思想体制への移行とその後（一九六七年ー）

第３章　非朝連－民戦－総連系文学の諸相

第１節　植民地下日本で活動した朝鮮人作家のその後
第２節　「解放」直後の動き（一九四五年ー一九五〇年）
第３節　一九五〇年代の動き（一九五〇年ー一九六〇年）

第４節　　一九六〇年以降の新展開（一九六〇年ー一九七〇年）
第５節　　韓国の独裁体制確立と文学活動の停滞
第４章　越境と離散の在日朝鮮人文学史
第１節「解放」後の朝鮮人移動史
第２節　「解放」直後の密航者たち
第３節　朝鮮戦争と在日朝鮮人文学
第４節　政治亡命者たち
第５章　大村収容所
第６節　亡命者としての在日朝鮮人作家
第７節　共和国への「帰国」
第８節　日本と韓国の距離
第９節　一九七〇年代以降の展開
第５章　二言語作家たち―金民・姜舜・金石範論―
第１節　金民―在日朝鮮人の典型の形象化―
第２節　姜舜―消えた朝鮮語詩人―
第３節　金石範―二度の創作言語の切り替えと四・三事件の文学作品化―
終章
第１節　　本稿での達成と限界
第２節　　言語問題の考察
第３節　　在日朝鮮人文学史の概要
参考文献

２　本論文の概要

本論文は、一九四五年八月一五日の朝鮮「解放」から約二五年の間に在日朝鮮人によって行われた文学活動の歴史を内在的に辿ることを主眼とする。日本語作品だけでなく朝鮮語作品、さらには漢詩もその範疇に組み入れ、在日朝鮮人諸団体が主導した媒体に発表された作品を中心に、その文学活動の諸相を描き出すという本論文の選択には、従来の研究の多くが日本語で書かれた作品を主な対象とし、世代論やアイデンティティ論というアプローチを採用してきたこと、それと関連して在日朝鮮人文学を「日本文学」との関わりの中でのみ捉える傾向を有していたことに対する批判的な観点が反映している。本論文では、「在日朝鮮人文学」を、在日朝鮮人による文学的営為のすべてを含むものと考え、朝鮮半島にルーツを持つ在日朝鮮人によるものであれば、その国籍、筆名、純血／混血の区別を不問にするという立場が採用されている。また、「解放」後の朝鮮の南北対立を背景として朝鮮―日本間を移動した人々も、この文学の担い手に数え入れている。こうした配慮はすべて、在日朝鮮人の文学的営為を、「日本」や「日本語」の境界を超えて把握する道を開くことを目指したものである。

第一章では、これまでほとんど知られてこなかった在日朝鮮人「女性文学」を掘り起こし、そ

の実態を明らかにすることが試みられる。「解放」後の在日朝鮮人女性の状況は植民地期に日本で暮らした人々の文字との関わりを解明することなしには理解しえないという立場から、植民地期に識字教育を受けられなかった女性たちが、「解放」後にどのように文字に接近し、どのような表現活動を行ったのかが検討される。まず一世女性が取り上げられ、当該時期の在日朝鮮人団体（主に在日朝鮮人連盟（以下、朝連）―在日朝鮮統一民主戦線（以下、民戦）―在日朝鮮人総連合（以下、総連）系列）内での識字教育と表現行為の関係が明らかにされる。続いて在日朝鮮人女性作家の先駆けである詩人李錦玉、典型的な総連詩人たち、小説を書いた安福基子や庾妙達、文学研究者の任展慧、評論やルポの分野で独自の活動を展開した朴寿南など、一世および二世の女性による創作活動が紹介され、作品が分析されていく。とりわけ、それぞれの作者と言語との関わりを重視した考察が展開される。また、文学作品として残されたものだけに注目するのではなく、当該時期の在日朝鮮人女性が文字を学ぶということ、そして文字を用いて自己表現をすることにまつわる複雑な背景と意味が、彼女たちが記した様々な形態の文章を手がかりに探求される。

第二章では、朝連―民戦―総連系列の組織内で行われた文学活動が追跡される。その活動は、規模や持続性の面からみて「解放」直後に始まる在日朝鮮人による文学運動の主流をなすものであった。朝連所属作家たちはマルクス主義的傾向を強く帯びており、彼らの創作活動の中心的な目標は、植民地人として受けてきた日本文化・文学の影響から脱却し、朝鮮の民族文化・文学の復興に参画することであった。その思いの強さは、創作言語に関する深刻な葛藤や論争となって、本論文が扱った全期間を通して表出することになる。

朝連期の文学運動においては、距離的、心理的近さもあり、当初は南朝鮮の動向に関心が寄せられた。だが、米占領軍と日本政府による朝鮮人学校の弾圧や、朝連強制解散を経て朝鮮戦争が勃発すると、次第に共和国への接近が顕著になっていく。著者はその過程を、各時期の文学団体の機関誌や機関紙から詳細に辿るとともに、民戦から総連への在日朝鮮人団体の移行にともなって組織内部で現れた、作品主題や創作言語の問題をめぐる葛藤を重視する。特に、金時鐘を中心とした大阪の詩サークル『チンダレ』と総連主流派の対立という形で顕在化した、民戦から総連への移行過程、すなわち在日朝鮮人の文学活動の共和国文学という枠組みへの編入過程における組織内部の対立が詳細に検討される。また、在日本朝鮮人文学芸術家同盟（文芸同）の前身となった在日朝鮮文学会（一九四八年発足）と共和国朝鮮作家同盟（後に文芸総と改称）が直結していく過程が、共和国の資料をも参照しつつ辿られていく。そののちに、一九五〇年代後半に共和国への「帰国」事業が始まるにつれて開花した文芸同の活動について、一九六〇年代に朝鮮語で書かれた小説作品を中心に論じられる。さらに、一九六七年に共和国が唯一思想体制に移行するにともない、総連および文芸同内部に生じた動揺と作品傾向の変化が分析される。そして最終的に、一九六〇年代末に総連や文芸同を離脱した作家たちが、一九七〇年前後の日本の文学界における「在日朝鮮人文学」という一ジャンルの形成に大きな役割を果たしたことが確認される。

第三章では、当該時期の文学活動の主流であった朝連―民戦―総連とは無関係に行われた、主として韓国支持派の在日朝鮮人たちによる文学活動が論じられる。

まず、植民地期に日本で活躍した朝鮮人作家たちの「解放」以後の動向が取り上げられる。特に、親日文学者の代表的存在であった張赫宙が、一九五二年に日本に帰化をするまでの、「解放」から七年間の軌跡が、その間に別の筆名を使って発表された作品や、他の在日朝鮮人たちとの関わりをも含め詳しく辿られる。

続いて著者は、『白葉』、『統一朝鮮新聞』、『漢陽』など、韓国支持を標榜する人々によって発

刊された新聞や雑誌の変遷を年代ごとに追い、それらの媒体で発表された作品から、各時期の書き手たちの「祖国」観や、在日朝鮮人としての自己意識を探求していく。その過程で、二大在日朝鮮人団体の一つである民団が、組織としては総連、文芸同と比肩するような在日朝鮮人の文学活動拠点となりえなかった事情が分析される。また、当時の韓国政府の無関心、あるいは在日朝鮮人に対する警戒心に発する棄民政策によって、「祖国」との距離を縮めることもできず、ひたすら自己の置かれた立場の不条理さを内向きに表現していった在日朝鮮人たちの書き手と、「解放」後に韓国から様々な形で日本へ渡った知識人たちとの、微妙な接触とすれ違いにも光が当てられる。

第四章では、当該時期の在日朝鮮人文学史を、「越境と離散」という角度から再検討することが試みられる。在日朝鮮人文学が、植民地期から日本に居住した人々のみによって担われたのではなく、「解放」後の南北朝鮮への／からの移動という、朝鮮人（作家）およびその作品の越境の経験とともにあったことが、各種資料の照合を通して解明される。

本論文で扱われる具体的な越境者としては、「解放」直後の朝鮮からの渡日／再渡日者たち、朝鮮半島のイデオロギー対立を背景として渡日した政治亡命者たち、朝鮮戦争に国連軍志願兵として参加した人々、長崎の大村収容所に収容された人々、共和国への「帰国」を選択した人々、またそのほかに、さまざまな事情により日本と韓国の間を往来した人々が数えられる。これらの移動者たちの姿を描いた作品、あるいは実際に越境を経験した人々による文学的営為が、筆者の調査によって得られた諸々の資料をもとに発掘され検討される。この作業によって、これまで在日朝鮮人文学に関する主流派的言説を形成してきた社会学的な世代論の枠組みが問い直され、在日朝鮮人文学を「ダイアスポラ文学」として、具体的作品や作家に即して論じる必要性が強調される。

第五章では、朝鮮語と日本語の両言語を実際に駆使しつつ創作活動を行った当該時期の優れた書き手である金民、姜舜、金石範の三人の作家が取り上げられ、各作家の言語との向き合い方が検討されるとともにその作品が分析される。特に最初の二人は、これまでわずかの例外を除いて正面から取り上げられることのなかった作家たちであるが、本論文では、初期在日朝鮮人作家の典型ともいうべき重要な作家として位置づけられている。

金民は、初期のいくつかの作品を例外として、ほとんどつねに朝鮮語による作品を発表してきた、総連―共和国の文芸政策を忠実に体現した作家である。金民の小説では真摯に生きる在日朝鮮人の姿が鋭い人間観察に裏打ちされた正攻法のリアリズムの手法で描かれるが、とりわけ著者は、彼の作品が在日朝鮮人女性の形象化において、当該時期の在日朝鮮人文学における最高の水準に達していたと評価する。本論文では日本語作品「西粉の抗議」「試写会」および朝鮮語作品「抱擁」「オモニ（母）の歴史」が取りあげられ、その小説世界の独自性が分析される。そして、ごく普通の、地道に生きる在日朝鮮人の姿を小説中に書き留めた金民の作品群が、一九七〇年代以前の在日朝鮮人文学において、理想とされた文学のあり方を具現したものであると結論される。

続いて取り上げられる詩人姜舜は、南北朝鮮の緊張関係によって在日朝鮮人の間に生じた分裂や反目を超越しようとする志向を持っていた。一九七〇年に日本の出版社から刊行された詩集『なるなり』（日本語）を手がかりに、それ以前の姜舜の詩人としての歩みが辿られる。現在の日本で彼は、自作の朝鮮語詩をみずから日本語に翻訳して発表した作品によってかろうじて記憶されているに留まるが、著者は姜舜を本質的に朝鮮語詩人であると位置づける。そして、姜舜がイデオロギーの違いや世代の差を超えて、他の在日朝鮮人作家、文化人との交流を広く持ち、ま

た詩作においては周囲の在日朝鮮人を愛情深く描きだした、「民衆詩人」と呼びうる存在であったことを強調する。

姜舜は、一九六〇年代末の総連内の混乱によって組織からの脱退を余儀なくされたが、同時期に総連を離脱した作家の多くが、一九七〇年代以降は日本の文学界に活動の場を移して活躍していったのとは対照的に、その流れとほとんど無縁に朝鮮語による詩作を継続した。このような姜舜の文学的営為が、共和国にも韓国にも、そして日本にも、想定できる読者がほとんど存在しない中で行われた孤独な作業であり、きわめて特殊な性格のものであることが強調される。

金石範は、現在では長編『火山島』等によって日本の文学界で確固たる地位を占めており、金石範文学についての論考も少なくないが、本論文ではこれまで詳細に論じられることがまれであった一九七〇年以前、つまり作家の経歴としては初期に当る時期に焦点が当てられている。金石範は当初は日本語で小説を書いたが、一九六〇年代に入ってから朝鮮語による執筆活動に専念した。だが一九六〇年代末に総連を脱退すると、再び日本語を使って書くことを選んだ。また組織内での創作時代には、総連―共和国文芸政策の影響下にありながらも、すでに済州島四・三事件をライフワークとして設定しており、この事件がつねに中心的主題とされてきたことが確認される。この観点から著者は、金石範が総連を離れる直前まで『文学芸術』誌に連載していた朝鮮語版「ファサンド（火山島）」を、出世作『鴉の死』（日本文）および日本語版『火山島』と比較検討する。そして、金石範の朝鮮語創作時代と彼の後の日本語作品執筆との連続性と非連続性を指摘するとともに、金石範が朝鮮語創作時代を経たことが、後年の日本語版『火山島』執筆に大きな意味を持ったことを明らかにした。最後に、金石範の総連離脱後に書かれた創作言語に関する評論が検討され、金石範文学が日本語による在日朝鮮人文学の新地平を開くことになったのは、使用言語の問いと徹底的に向き合い続け、朝鮮人が日本語で書くという矛盾との不断の格闘の成果であったという結論が導かれる。

終章では、著者は、本論文によって残された課題として、民族組織と無縁に文学的営為を行った人々、また、日本人と朝鮮人との混血作家、あるいは日本名作家の作品研究を指摘し、言語問題を総括するとともに、本論文が明らかにした在日朝鮮人文学史の概要を記して論を閉じる。

３　本論文の成果と問題点

本論文の成果は第一に、在日朝鮮人文学の日本における受容の条件の批判的検討から出発し、コーパスを日本語文献から朝鮮語文献、さらには漢詩までを含むテクスト群へと大きく拡大して、これまで不可視化されてきた文学的営為の諸相を明らかにしたことである。とりわけ、在日朝鮮人女性の文学活動を識字の可能性から検証し、何人もの忘れられた作家、作品を掘り起こし評価したことは特筆に値する。

第二に、朝鮮民主主義人民共和国および大韓民国と在日朝鮮人の関係を適切な時期区分を通して再考し、この関係の変遷が文学活動に、とりわけ文学言語の選択および文学観にもたらした意味に鋭い分析を加えたことである。この作業を踏まえ、朝鮮語作品を中心に、個々の作品の簡潔であるとともにニュアンスに富んだ読解を通して雄大な文学史的展望を切り開き、有名作家の作品についても独創的な再解釈の可能性をもたらしたことは刮目すべき成果であった。

第三に、植民地期以来の親日作家から、朝鮮民主主義人民共和国に帰国し、その後も創作活動を続けた作家まで、対照的なイデオロギー的立場に立つ作家たちが直面した歴

史的状況や選択の意味を可能なかぎり内在的に理解することを試み、第三者的な公平性ではなく、ときに激しく対立する複数の当事者の視点から立体的に時代のリアリティを浮かび上がらせ、独創的な均衡を文学史的記述にもたらしたことである。本論文が扱った時期の日本社会と在日朝鮮人社会の隔絶、南北朝鮮間の葛藤の激しさを思えば、これは驚くべき成果であり大きな賞賛に値する。

とはいえ、本論文にも若干の問題点は存在する。とりわけ、四章までの文学史的記述と五章における三人の作家の作品研究の関係がかならずしも明確ではなく、論文全体の構成にやや不均衡をきたしていることが挙げられる。しかし、この問題は本論文が全体として達成した成果にくらべれば瑕瑾に類するものであり、その価値を大きく損なうものではない。本論文が、著者の今後の活躍をおおいに期待させてくれるすぐれたものであることにかわりはない。

以上の判断のうえに、審査員一同は、本論文が独創的かつ優秀であることを認め、一橋大学博士（学術）の学位を授与することが適当であると考える。

最終試験結果要旨

２０１１年3月９日

受験者　　　　　　宋恵媛
最終試験委員　　　鵜飼哲　イ・ヨンスク　松永正義

２０１１年２月７日、学位請求論文提出者　宋恵媛氏の論文および関連分野について、本学学位規定第８条第１項に定められた最終試験を実施した。

試験において、提出論文「在日朝鮮人文学の歴史－１９４５年－１９７０年」に関する問題点及び関連分野について質疑を行い、説明を求めたのに対して、宋恵媛氏は適切な説明を以て応えた。

よって審査員一同は、宋恵媛氏が学位を授与されるに必要な研究業績及び学力を有すると認定し、最終試験の合格を判定した。